GEOCITIES コミュニティトップ ランキング サーチ 街角広場 ゲストブック
金融情報はウォール街コミュニティ
GALA

中南米からのつぶやき～完全版（1998年～1999年）

医学部4年　田中健之（ t-take@df6.so-net.ne.jp ）

★1998年4月から約9ヶ月間、中南米に滞在した時の体験記みたいなものです。昨年発行されたMedical Press （熊大医新聞部発行）vol.78,vol.79に寄稿した原稿を少し手直しして、さらにその続編を足して内容的にも当たり障りのないよう公の場に出せるように編集しました。ちょっと長いけど、気楽に読んで下さい。

1～まず始めにざっと　2～出発　3～グアテマラ入国
4～ケツァルテナンゴ　5～アンティグア　6～ウミガメ保護センター
7～グアテマラの国鳥ケツァル　8～ホンジュラスへ　9～南米大陸へ
10～ペルー入国　11～ボリビア入国　12～チリ入国
13～再びグアテマラへ　14～野生生物レスキューセンター
15～おわりに

1～まず始めにざっと

今回、僕が1年間休学したのは、ぶらぶら旅行をしたいというのがメインであったが、その他、中米グアテマラでの野生生物保護活動のボランティアとして働いたりもした。参加したのはグアテマラの現地NGOであるARCAS（アルカス：Asociacion Rescate y Conservacion de Vida Silvestre ）という団体である。アルカスはグアテマラの2ヶ所で活動を行ったおり、1ヶ所は太平洋岸ハワイ自然保護区（アメリカのハワイとは違う）でのウミガメやカイマン（ワニ）やイグアナの保護プロジェクトで、もう1ヶ所はグアテマラ北部のフローレスという町の近郊のジャングルに建てられた野生生物レスキューセンターでの活動で、そこには密猟のために絶滅しかかっている動物たちを保護して彼らが元々住んでいたジャングルに戻すという活動で、このフローレスのレスキューセンターには去年（97年）の夏休みにも2週間ほど参加した。今回はこれら2ヶ所で数ヶ月ずつ働く予定である。ボランティア間のコミュニケーションは英語とスペイン語であるし、中南米はちょっと物騒な所でもあるしスペイン語を身につけておいたほうが何かと便利なので、最初の1，2ヶ月はグアテマラのスペイン語学校に通うことにした。したがって大ざっぱな予定としては次の通りであった。
4月、5月（スペイン語学校）、6月～8月（ウミガメ保護区）、9月～11月（中南米を旅行）、12月（フローレス動物センター）、1月（また旅行）

2～出発

　1998年4月22日に成田と出発した。妹がオレゴン州の高校に1年間交換留学しているのでそこへ立ち寄ってから行くことにした。
アメリカに寄った理由はいくつかあって、妹に会ったり、マラリアの予防薬であるクロロキンを

買ったり、グアテマラに行くにはアメリカ経由しかなかったりしたからである。マラリアに関してはご存知の方も多いと思うが、アフリカや南米や東南アジアなどではクロロキン耐性のマラリアも出現しており、ワクチン開発が重要であるが、この文章を書いている時点では、蚊にさされないこと以外ではクロロキンを服用することが予防法として一般的である。それでそのクロロキンはまだ日本では一般の人は買えない(一部の研究者が手に入れることができるらしいが)ので、アメリカもしくは現地で購入するしかないのだ。今回はポートランド・メディカルセンターのイミュニゼーションクリニック・フォー・インターナショナルトラベラーズ(海外旅行者専用クリニック)という所に予約して行った。僕としてはアメリカの病院に少し興味があったのでいい機会だった。まず受付で問診票に記入することからである。これが結構詳しく質問があり、例えば滞在する場所、およびその場所は都市か田舎か、どれくらいそこに滞在するか、今までに受けたワクチン(僕の場合だと日本で受けたA型、B型肝炎、破傷風、狂犬病など)その他いろいろあったが忘れた。それを提出してしばらくすると、ドクターに呼ばれて、そこでまたいろいろ聞かれた。ドクターはおしゃべりなおばちゃんで、親切に応対してくれた。クロロキンの処方と使用上の注意をしてくれたのはもちろん、下痢の抗生物質の処方や、チフスのワクチンの接種も勧めてくれた。さらに虫除けスプレーの効果的な使用方法やその国で注意すべき病気など最新情報や薬の効果や副作用などが詳しく書いてある国別のマニュアルの冊子があり、そのグアテマラの冊子を見ながら説明を受け、ついでにその冊子を貰い、いろいろ雑談をして診察は終わった。
これだけのことを病院がやってくれたのは意外だったし、日本でもこのようなシステムをすればいいのにと思ったが現在の医療財政の問題を考えるとそう簡単にはいかないだろう。熊本で予防接種の予約をするために○赤病院に電話したときでも「はあ？グアテマラ？どこ？アフリカ？」などいかにもめんどくさいという気持ちがこっちに伝わってきて「このクソババア！」とどなってやりたい気持ちになった。その病院が悪いじゃなくて、たまたまその担当の人が横柄な態度の人だっただけだろうけど。
そんなこんなでポートランドを後にしていよいよグアテマラに入国である。

3～グアテマラ入国
4月26日、約8ヶ月ぶりのグアテマラである。入国手続きも簡単で、僕のパスポートを見て、係官が「オー、ハポン(日本)、ハポン、ハポン」と妙なリズムで3回唱えてスタンプをポンと押しただけだった。空港のバッゲージ・クレームには、アメリカからの出稼ぎから帰ってきた人たちの手土産のテレビ、ラジカセなどのダンボールなどが目につく。空港を出るとタクシーの運ちゃんたちが客の取り合いで騒がしい。僕は空港がある首都のグアテマラシティーからバスで4時間半くらいの町ケツァルテナンゴという町のスペイン語学校で始めは勉強する予定だったので、その日のうちにそこまで行かなくてはならなかった。街の空気は車の排気ガスで汚れていて、第3世界特有のエネルギーを感じる。
ここで、グアテマラについて少し説明をする。まず文化的にはメキシコのユカタン半島とならんでマヤ文明の遺跡があちこちに残っており、マヤ系先住民やその混血などが人口の大半を占めている。政治的には、あまり溯ると長くなるので、最近のことについて述べると、1940年代にグアテマラやその他中南米において、社会主義的な政策転換が行われるようになり、それがどんどん中南米全体に拡大することを恐れたアメリカが裏で工作して、隣国ホンジュラスで反革命軍を結成させ、当時のグアテマラの政権を倒した。それから31年間、軍人政権のたらい回し状態が続き、また先住民族が弾圧されその結果、そのような政権に反抗するゲリラが結成され、内戦状態が続き、1997年4月にようやく政府とゲリラとの間に平和協定が結ばれた。しかし、まだ問題は山積である。地理的には、太平洋とカリブ海に挟まれて、だいたい台形の地形で、火山国でもあり、2，3千メートルの火山がいくつもあり、グアテマラシティー、アンティグア、ケツァルテナンゴなどグアテマラの主要都市の多くは、高度1千～2千メートルくらいの所にあり夜や明け方は結構冷え込む。しかし、熱帯に属しているので海岸などの低地はかなり蒸し暑い。中南米には外国人を対象にしたスペイン語学校がかなりたくさんあり、中南米を旅行しようとしている人やスペイン語を純粋に勉強したい人などが多く学んでいる。特にグアテマラ、メキシコ、コスタリカ、エクアドル、ボリビアなどの国が有名で、グアテマラシティーから車で1時間くらいの町アンティグアは人口3万人くらいなのに学校が100校くらいある。僕が学ぶケツァルテナンゴにも30校くらいある。僕の学校はSAKRIBAL(サクリバル)といって小規模な学校である。

4～ケツァルテナンゴ

サクリバルの料金は授業料（マンツーマン5時間／日）＋ホームステイ代（三食付き）でUS＄１００／週である。サクリバルの校長はオルガというおばちゃんでいつも陽気で歌や踊りが大好きな人で、その他にアメリカ人のジェニファーが英語を話さないオルガをアシスタントとしてサポートしている。
4月26日、事前にE－MAILでジェニファーに知らせておいたのでバスターミナルまでオルガが迎えに来てくれていた。そのまま、オルガのおんぼろワーゲンで学校まで行った。途中助手席のシートが車が止まる度に金具が外れているために前にがくんとスライドしたり、バックミラーやサイドミラーやシートベルトが全然付いていないことなどに驚いたりしていると、いきなり、「これがグアテマラよ！」と彼女は言った。もう着いたのが夜の8時だったのですぐにホストファミリーのところに行き、明日からの授業に備えようとしたがその日はさすがに疲れてすぐに寝てしまった。とりあえずホストファミリーの紹介をしておくと、親父さんがアゴスト（50歳）、奥さんがエルマ（47歳）息子がパブロ（22歳）、マルコス(21歳)、マリア(19歳)である。グアテマラの大学生は大半が学校で行きながら働いている。パブロは大学で会社経営の勉強をしながら、機械の卸し売り商として働いており、マルコスもマリアも同様に働きながら大学に通っている。
ここケツァルテナンゴはグアテマラの第2の都市、とはいえ人口はグアテマラシティーの120万人に対して約10万人であるので、大して大きくはない。町の作りは中米の典型的な作りで、町の中心にカテドラルという教会があり、その前にはパルケ・セントラルという中央公園があり、そこを中心に道が碁盤状に広がっている。町と町を結ぶ幹線道路は大半が舗装されているが、町中の道はでこぼこの石畳であったり、未舗装の道だったりする。そこを日本の基準からすると廃車寸前の車が排気ガスをどんどん出しながら走っており、ローカルバスはアメリカの小学校の黄色いスクールバスの払い下げを使用している。
さて、4月27日、学校初日、授業が始まる前に教師、生徒をみんな集めてオリエンテーションがあった。まだ、スペイン語には多少のハンディがあったので、アシスタントのジェニファーが英語で通訳してくれた。まずは自己紹介から始まった。この学校は小規模で、しかも4月、5月というのはいわゆるオフシーズンなので、なんとそこで勉強しているのはキンバリーというカナダの大学生で、この学校ではもうすでに1ヶ月くらい勉強していた。グアテマラを旅行している途中だという。新しく入ってくる生徒は僕の他に、中米を旅行しているアマンダとジェニファーというこれもカナダの大学生。キンバリー（キム）の先生はラウール、アマンダの先生はスーリー、ジェニファーの先生はアンナ、そして僕の先生はAngela、スペイン語ではアンヘラと発音する。英語ではアンジェラ、語源的には天使といったところ。オリエンテーションは毎週月曜日に行われ、その週の予定が説明される。この学校は基本的には午前に授業があり、午後は様々なアクティビティーが行われる。校長のオルガはグアテマラのいわゆる恵まれない人たちへの関心か強く、孤児院への慰問や郊外の村でのホームレスのための住宅建設の手伝いなどをアクティビティーに組み込んでおり、その他グアテマラの悲惨な過去のドキュメンタリービデオの鑑賞やマヤ文明の聖典「ポポル・ブフー」の勉強会などその他様々な活動があり、金曜はだいたい毎週みんなで学校のキッチンで夕食をつくり、パーティーがあるといったアットホームな学校である。
とりあえず初日の午後は市内案内だった。中米の町にはメルカドという市場がいくつかあり、そこでは近くの村から新鮮な野菜やフルーツや日用雑貨を持ち寄った人々がそれらを道端で売っている。物は特に野菜や果物は安い。例えばマンゴは1個が0．5ケツァル（US＄1＝6ケツァル）、りんご1個が0．25ケツァル。
町で目につくのは銃を持った警備員である。マクドナルドなどのファーストフード店の入り口や銀行、ガソリンスタンドの売店、コーラなどを運んでいるトラックの運ちゃんもライフルを持っているし、そして駄菓子屋が異常に多く、商売が成り立っているのか不思議なくらいだ、しかもその大半の駄菓子屋は物がとられないように鉄格子がしてある。
国際電話は公衆電話か、電話局のオフィスからかけられる。日本に電話する時は僕は電話局からかける。電話のかけ方はこうである。まず受付でかける相手の名前と電話番号と国を用紙に書く。そして、しばらくすると、名前を呼ばれて、「何番ブースへ行け」といわれる。言われたブースへ行って受話器をとってしばらくすると通話できる。郵便局は安いが、その分リスクもあり、だいたい日本まで2～3週間かかり、運が悪ければ永遠に届かない。だから大切なものはかなり高くなるけどDHLやFedexなどの民間の宅配業者にたのむのがよい。しかし98年の夏頃にカナダの民間の会社が国営の郵便を買収して郵便料金もかなり上がったぶんサービスもかなり改善されたという話を後に聞いた。
そうこうしているうちに、5月に入り、新しくアメリカからイアンというひげ面の兄ちゃんがやってき

て、その2日後のはマウリーンというアメリカ人の看護婦かやって来た。それから3日後には、スノーボードのインストラクターをしているというアメリカ人のルスがやってきた。それから1週間後にはドイツからイザベルという大学生がやってきてやっとにぎやかになってきた。
ここケツァルテナンゴは、さほど大きくもなく、長期で滞在するには意外といい所で、ディスコや映画館も数ヶ所あり、映画館のほかにビデオ・カフェといってカフェの奥の10畳くらいの1室に椅子が15個くらい並べてあり、大画面のテレビが1個おいてあり、日替わりでヒットした映画を8ケツァルくらいで見せてくれる。バーもバンドが生演奏してくれるところなど、なかなかのところがある。いつも気をつけることは、清算のときにレシートをチェックすることだ。たまに注文してないものが勝手にオーダーに書かれていることがあるからだ。それを何事も無かったかのように平然と清算時にもってくるのだ。
僕の学校の午後のアクティビティのいくつかはまあ次のようなもの。近くの村でのホームレスのための住宅建設。これは週1回行っているもので、そこまでの移動は例のおんぼろローカルバスか、もしくは、先生のトヨタのおんぼろピコップの荷台。グアテマラのバスも日本以外のほとんどのバスがそうであるように乗る前にお金を払う。しかし、ここでは、ラッシュ時にはすし詰め状態で、黒い煙をふかしながら走る。こんな時は、運転手とは別に車掌みたいな人が常に乗っているので、ぎゅうぎゅう詰めのなかで走行中にお金を集めに来る。不思議なことに彼は、誰が途中から乗ってきたか、誰からまだお金をもらっていないかを実に正確に覚えているのだ。さて仕事の内容としては実に単純労働で、セメントをつくり、それを溝に埋めて、ブロックを重ねるといった感じで、皆ドロだらけになりながら行う。休憩時間には村に人が、一応沸騰してあるのだが、なんだかざらざらと舌触りのする水で作ったジュースをもってきてくれる。皆、これを断るわけにもいかず、しぶしぶと飲んでいた。あと孤児院に行って子供たちと遊んだり、お世話したりした。これが午後のアクティビティとしては仕事らしいもので、その他はほとんどが遊びであった。例えば、サンフラン・エル・アルトという村を訪ねた。ここは木曜日と日曜日にグアテマラで最大規模の食料品のメルカド(市場)が開かれ、村中どこの道端でも物を売っており、前に進むのも難しいほどの混雑で、スリがかなり多いと聞いていたので、財布だけは気をつけていた。週末を利用して学校の仲間とパナハッチェルという町にも行った。この町はガイドブックによると世界で最も美しい湖の1つというアティトラン湖の町である。移動は例のローカルバスで、山道をラテンミュージックをガンガン流しながら、いつ横転するかわからないような運転で約3時間かけて行った。そこは、いろんな意味で美しかった。海抜1500メートルの高地で、湖の周辺には、3000メートル級の火山が4つそびえ立っている。湖岸では村の人たちが、洗濯したり、体を洗ったり、チビたちがパンツ1枚で泳いだりしており、その湖が彼らの生活の中心になっている。そのパナハッチェルという町の対岸にいくつか小さな村があり、そこにもいくつか宿がある。僕らはその村の1つであるサン・ペドロ・ラ・ラグーナという村に泊まることにした。そこに行くには、約20分かけてボートで行くしかなく、僕らは怪しげなおやじからボートの切符とおもわれる紙切れをしばらく値切ったすえ、購入した。しかし、桟橋にはボートはなかなか来ず、そのおやじもいつのまにかいなくなり、30分くらい待っていた。皆だまされたと思い始め、ボートに乗る直前に切符を買うべきだったと誰かが言った。しかし、そうこうしているうちにまたそのおやじが現れ、「ごめん、ごめん」と言いながら、船はすぐ来るからということだった。しばらくすると、12, 3歳の少年2人がボートを操縦しながらやってきた。せいぜい10人乗れるかどうかのボートであった。午後3時くらいだったので、波が荒くなり、ビニールシートをかぶり、びしょぬれになりながらやっと対岸の村に着いた。宿は1泊10ケツァル(約200円)の所に泊まった。その他のアクティビティとしては、サルサやメレンゲなどのラテンダンスのレッスンや中南米の過去の内戦などを扱ったドキュメンタリービデオなどを見たりすることなどであった。
このような話を書いていると、グアテマラというくにがなんだか平和で別に何の問題もないように思えるだろうが首都のグアテマラシティーはリトル・メキシコシティーと呼ばれていて場所によっては大変危険な町であり、時々ローカルバスや長距離バスではバス強盗も出現し、それに最近現地の新聞でよく目にしたものは、環境問題についてである。ある日の新聞にはメキシコシティーの様子が載っていたが、主に車や工場の排ガスにより市内や郊外の空気はかなり汚染され、防塵マスクをして通勤している人の写真が載っていた。また5月、6月にはメキシコやグアテマラの熱帯雨林で大規模な山火事が多発しており、グアテマラ政府も手におえず、アメリカ政府に消火の援助を要請していた。5月の中頃から、通常は雨期に入るのだが、今年はなかなか雨が降らないと地元の人達も言っていた。エル・ニーニョの影響は当初は南米のペルーやチリなどを中心に受けていたが、中米にもその影響が出始めたのかなという感じをうけた。
ケツァルテナンゴにおいても、大気汚染は身近であった。前述したように、バスやトラックは旧式

のものばかりで、排気ガスが強烈で、夜飲みに行った帰りなどでも車もほとんど走っていない町中の空気は、排気ガスのにおいが残っているし、街灯に照らされた辺りはやや霧がかっているようにみえることもしばしばあった。学校でも何人かは、そのためにのどを痛めるひともいたし、僕も実際おそらくそのためだと思っているのだが、ひどくのどを痛めて熱が出て、2，3日寝込んだこともあったし、鼻をかむとたまに、鼻水に黒いものが混じっていることもあった。
そうこうしているうちに、5月末までこの学校に滞在する予定だったので、残り1週間となった。この週はたくさんの生徒が学校を去っていった。キムはこの後、グアテマラを1，2週間旅行してカナダに帰るという。アマンダとジェニファーはグアテマラから南へ下り、コスタリカに入国して、2，3週間旅行してから、カナダに帰るという。ルスはホンジュラスでスキューバダイビングのライセンスを取って、その後グアテマラのアンティグァ市に戻り、そこで何日か滞在したあと、アメリカに帰るという。僕も1週間後はアンティグアで何日か過ごす予定だったので、ルスと場所と日時を決めて会う約束をした。
あっという間にみんな去ってしまって、残りはイアンと僕の2人だけになってしまった。2人ともあと1週間勉強して、ケツァルテナンゴを去る予定なので、つまり1週間後には生徒は誰もいなくなるわけだ。校長のオルガはとても残念そうである。しかし、6，7，8月になると夏休みを利用して、毎年欧米からたくさんの人が来るそうだから、まあ心配はいらない。
5月29日金曜日、最後の授業が終わり、学校で先生たちが昼食をつくってくれ、昼食後、僕は終了証書をもらった。たった5週間だったけれども、中身も濃い5週間だった。6月1日、とりあえず僕はアンティグアへと移動した。

5～アンティグア

約束どおり、ルスと会い、2，3日一緒にアンティグアを観光した。アンティグアはスペイン統治時代の町並みがかなり保存されており、グアテマラでは1番美しい町であると思う。したがってそれなりに観光客も多い。町の正面にはアグア火山（3766メートル）という、富士山にそっくりな火山があり、その山とアンティグアをはさんだ対面に、十字架の丘という丘があり、その丘の上には文字どおり大きな十字架がそびえ立っておりアンティグアとアグア火山を一望できる、非常にいい眺めである。丘の上までは徒歩で約15分かかるが、2年前(96年)に、丘の上で観光客が殺害されて以来、午前9時から午後5時までは丘の上までの遊歩道の入り口と丘の上には警官が警備のため常駐している。彼らポリスもあまり信頼できないが、まあ、いないよりはましである。しかし、僕らが丘の入り口に来たのは5時ちょっと前で丘の上にいた警官たちがすでに下におりてきていた。僕らはせっかく来たので丘の上まで登りたいと言うと、もう上に警備がいないので行かないほうがいいと言う、でもどうしても上からの眺めを見てみたいからちょっと上まで付いてきてくれない？と無礼にも頼んでみると渋々オッケーしてくれた。眺めを堪能して下まで下りてお礼として2人で相談してチップをあげようとした。しかし、彼等はそれを受け取ろうともしなかった。警官もあまり信頼できないといわれる中南米においてアンティグアの警官はまだまだ捨てたもんじゃないかも。ルスがアメリカに帰った後は、ホテルが同じだったスイス人のペトラと、パカヤ火山（2550メートル）のトレッキングツアーに参加した。前述したように、グアテマラには多くの火山があり、火山トレッキングが盛んである。しかし、単独や2，3人などの少数で登ると、たまに山道で強盗がでるので、トレッキングツアーに参加するのが一般的である。このようなツアーでは、たいてい、その山を良く知っているガイドと2名の警備員が同行して10人くらいで登る。パカヤ火山はアンティグアから近く、初級者コースで、しかも天気がよければ頂上から太平洋が望めるということだった。しかし、当日はくもりで、あまり景色は期待していたほどはよくなかった。

6～ウミガメ保護センター

6月初め、僕はグアテマラシティーにある、アルカスのオフィスを訪ねた。アルカスはグアテマラ国内での野生生物保護NGOでは、中心的な存在であるが、そのオフィスは意外と小

さい。スタッフは、理事長のグアテマラ人のミリアム（彼女は弁護士として、彼女の弁護士事務所を別に持っている。）を筆頭に、事務局長のコラム（彼は数年前日本で働いたことのある日本通のアメリカ人）、グアテマラの子供たちへの環境教育を担当するグスタボ、マヌエル、ジーナ、そしてミリアムの夫であるスコット（彼もアメリカ人）、その他にアルカスのプロジェクトが行われている2ヶ所に数人ずつスタッフがいる。コラムとはE－MAILで事前に何度もやりとりをしていたので、快く迎えてくれた。とりあえずこれから6，7，8月の3ヶ月間参加するウミガメ保護プロジェクトについての説明を受けた。

ここで、なぜ今ウミガメの保護が必要なのかを簡単に説明する。ウミガメの種類によるが、だいたいウミガメは一回の産卵でピンポンボール大の卵を100個くらい産む。まず海から砂浜に上がってきて、波がやってこない所まで来ると、彼女のひれで一生懸命卵をうむための穴を掘り始める。100個の卵が収まるくらい十分な大きさの穴が掘れると、今度は1個ずつゆっくりと卵を産み始める。この生み始めるまでの過程がカメが最も周囲に対して敏感な時なので、絶対に音をたててはいけないし、光をあててもいけない。もし、なんらかの刺激を彼女に与えると産卵せずにまた海に戻ってしまう。卵を産み始めるとカメはたまにくるしいのであろうか、よく聞いてみると「ウー、ウー」というようなうめき声をあげる。そして、目元を見てみると涙のようなものが流れている。（この涙については、せっかくのいい話を台無しにしてしまいそうなのだが、カメの体内の水分を出すことによって目の乾燥を防いでいるという説がある。）産卵が終わると、また自分のヒレで卵の上に砂をかぶせ、そして最後はそのヒレで自分の巣をたたいてしっかり砂をかためて、またゆっくりと海へと帰って行く。そのような自然の状態の巣からふ化して海へ入り、20年、30年して大人になり、産卵にその砂浜へ帰ってくるのは、ほんの1％～2％らしい。なぜそんなに低い生存率かというと、まずふ化して卵の殻を割って砂の中から這い上がってきた子ガメはちょうど人間の手の甲くらいの大きさしかないので、鳥やトカゲやヘビや犬などにねらわれ、海の中に入っても、今度は大型の魚やカモメなどにねらわれるからである。それにウミガメの数の減少にさらに拍車をかける要因がいくつかある。中南米ではウミガメの卵が精力剤として需要があり、多くの人がオレンジジュースやビールなどのお酒に混ぜて飲んでいる。したがって、産卵シーズンには、貧しい村人たちにとってはいい稼ぎになるので、町の酒場に売るために卵を集めようと砂浜に大勢の村人がおしかける。それに、世界中でカメが産卵できる砂浜が観光開発などによって減少してきている。グアテマラでナショナルジオグラフィックという雑誌を読んだ時に、こういう記事があった。本来ウミガメはシャケと同じように自分の生まれた所に産卵としに戻ってくるといわれているのだが、マイアミのある場所で以前は砂浜だった所、今はアスファルトで駐車場になっている所にウミガメがやってきてヒレを血だらけにしながら卵を産もうとしていたカメが発見されたという。その他、漁船の網にひっかかって死んでいるカメも多く報告されている。このような理由で、アルカスなどの多くの中南米のウミガメ保護プロジェクトでは、夜、砂浜に産卵にやってくるカメを探し、人工ふ化させるために、産んだ卵を収集したり、地元の人達に卵の寄付を募ったりして、人工ふ化させて、ふ化した子ガメを海に放流するといった活動を行っている。

アルカスのウミガメ保護プロジェクトの拠点となっている所は、グアテマラの太平洋岸のハワイ村という、偶然にも名前だけはアメリカのハワイと同じなので、一見リゾート地っぽい響きがあるところであるが、実際は、この村には電気も水道も通っておらず、広大なマングローブ林とそれによってできている自然の運河に囲まれた人口1千人にも満たない漁村である。そのへんにココナッツの木やマンゴーの木がたくさんあり、ココナッツのジュースを飲みたくなったらそのへんのチビたちにその実を上から落とさせて飲めるし、マンゴーを食べたい時は勝手にその木から実を採って食べたりしていた。そのハワイ村にグアテマラシティーから行こうとするならば、マングローブ林の運河をボートで渡るしか方法はない。そのハワイ村から1キロくらい離れた砂浜沿いにアルカスウミガメ保護区がある。保護区といっても大した設備はない。砂浜から約20メートル離れたところに、野球場が2つくらい入る敷地があり、そこに今年僕らが建てた新設の人工ふ化場があり、その他、地元の子供たちへの教育用教材として子ガメを4，5匹入れてある小プールがある。また敷地の中央にはボランティ

アの宿舎がある、この宿舎は2階建てで、1階にはキッチン、トイレ(さそりがたまに出る)、シャワー(シャワーといっても水溜めがあるだけで、そこに井戸から水をくんで行水するだけ)、小さな図書館、広い吹き抜けになった場所(ここにハンモックをつるして昼寝するのが気持ちいい)があり、2階はマングローブ材とやしの葉で作った屋根と蚊帳で囲まれたボランティア用の大部屋となっている。そのボランティア宿舎の裏側には、繁殖プロジェクトでワニとイグアナが飼育してあり、その横には、飲み水やシャワーなどのための井戸がある。もちろん、飲み水は沸騰か塩素消毒する。ここの保護区には現地職員が2人いる。アグストとホスエというおじさんである。その他、前述のコラムが毎週末にグアテマラシティーから保護区をチェックしに2，3日泊りがけでやってくる。アグストはハワイ村に家族と住んでおり、ホスエの家族はグアテマラシティーに住んでいる。したがって、ホスエは11日間保護区で働き、4日間グアテマラシティーでの休暇というサイクルで雇われている。しかし、ホスエはコラムの目を盗んでは、頻繁にグアテマラシティーに帰ったり、他のボランティアからお金を借りたりしてトラブルが多いので、後の話によると、10月ごろに解雇されたらしい。一方、アグストはいいやつであった。

僕が保護区に来た6月はまだウミガメの産卵シーズンが始まろうとしていた頃ということもあって、やってくるボランティアもウミガメもまちまちであった。とりあえず6月は、去年の台風で壊滅した人工ふ化場に代わって、新しい人工ふ化場を建設することで始まった。人工ふ化場のつくりはシンプルで、しかし、言葉でそのつくりを説明するのは難しいのだが、まず、保護区の敷地内のなるべく砂浜に近いきれいな砂がある場所にマングローブで柱などの骨組みをつくる、大きさはだいたい縦15メートル横10メートルくらいで1メートル間隔に2メートルくらいに切った真っ直ぐなマングローブ材を埋めていく。(砂地に木の棒を埋めるというのはなかなか困難である。掘っても掘っても砂が穴に入っていく。)屋根は保護区内に生えているココヤシの葉でつくり、壁は高さ1メートルくらいの板をはりつけ、そこから上はマングローブ材をこぶし1個分間隔で打っていく。これで、鳥や犬などの動物から埋めた卵が守れるのである。この人工ふ化場建設のために、僕らは5日間連続して約150本のマングローブ材の調達のために、アグストにマングローブ密林の奥へと連れて行かれた。アグストは材木調達の時、マングローブ林の後の成長を考えて、1ヶ所で全部の木材を調達するのではなく、毎回場所を変えてそれを行った。マングローブはご存知のように、水中に育つ唯一の植物なので、アグストがナタでどんどん切り倒していく木材を僕たちは何がいるかわからない茶色に濁った水の中にひざまで浸かりながら、乗った来た手漕ぎボートに積むといった単純作業を続けた。その作業は、なにせ沼地であるので、蚊が小バエのようにたかってきて、両肩に木材をかつぎボートまで運んでいる時なんかは、両手がふさがっているので、そんな無防備な手の甲に十数匹もの蚊がいっぺんに血を吸いにくるといったなんともおそろしい体験をした。このあたりの常識として、日中の蚊はデング熱を、夕方から夜にかけての蚊はマラリアを伝播する可能性があるので、デング熱のことがかり心配していたが、結局3ヶ月間マラリアやデング熱にはかからなかった。しかし、7月の半ば1週間下痢が続き、下痢止めを飲んでも全く効果がなく、次第に便の色が黄色とも赤色ともいえない奇妙な色をしてきて、においも何ともいえないにおいを発し出してきたので、これは普通の下痢とは明らかに違うと思い、持参してきた寄生虫学の本やLonely Planet(ガイドブック)の様々な病気の項を読んでみると、明らかに似た症状がアメーバ赤痢とジアルジア性下痢に見られた。とりあえず、近くのなるべく大きな町の病院へ行くことにした。ここハワイ村のあるサンタロサ県の中心都市チキムリアまではまず、ハワイ村から定期小型ボートで1時間運河を渡り、パパチュラという町まで行き、そこからバスでほとんど未舗装の道路を2時間かけてやっとチキムリアまで行ける。とりあえず薬局に行き、このあたりで1番大きい病院を聞いて、そこで検便検査をやって1時間結果を待った。1時間後、ドクターに呼ばれアメーバ赤痢だといわれた。処方箋をもらい薬局に行き、2種類の薬を買った。病名がわかってなんだかほっとした。

このチキムリアには、ジャスミンとジャネケというオランダからのボランティアたちと行ったのだが、ハワイ村もそうだが、チキムリアにもほとんど外国人旅行者はいないので、町に着くなり僕らはどこを歩いてもみんなの注目の的であった。銀行でドルのトラベラーズチェックをグアテマラのケツァルに両替しようとした時には、窓口ではでき

ず、支店長室に連れて行かれ（変な東洋人が来たとでも思ったのであろうか）、どこでみていたのか「君さっき3人で町を歩いていたね、他の2人は誰？」といきなり聞かれ、異様にフレンドリーではあったのだがパスポートをチェックされ何の理由でこの町に来たのかなど様々な質問をされ、ようやく両替できたわけだった。
7月には産卵のオフシーズンの間、グアテマラシティーの事務所に置いてあった4輪バイク2台をハワイ村に運んできていよいよ本格的な今年の活動が始まった。6月には、みんな毎晩1，2時間砂浜を歩いてカメ探しに行っていたので、バイクが来て少しは能率が上がった。バイク班と歩き班をみんなでローテーションしながら行った。このあたりの砂浜は何の障害もなく数十キロと続いているので、毎晩のウミガメ探し（ビーチパトロール）のノルマは保護区からビーチ沿いに北へ約10キロのモンテリコというグアテマラ唯一のリゾート地までと保護区から南へ10キロのラ・バラという場所までで、この場所はマングローブ林の運河が海へ流れ出ている所で、ちょうど砂浜がそこだけとぎれている。満月の夜にそこに来ると月明かりでとても美しい場所である。
7月はちょうど雨期に入る頃で、夜のビーチパトロールの時にはげしい雨が降ることが多かった。雨の夜で最も印象に残った光景は水平線に落ちる雷である。一瞬、お昼のように明るくなり、ズドン！と水平線に稲妻が落ち、遠くに落ちた時には4，5秒たって音が伝わってくる。なんとも美しい。モンテリコまで行く時はそこでビールを飲んでちょっと休憩してまたビーチパトロールに出かけるのが常だった。一杯やるところは“PigBen”というカナダ人のマイクという男がやっているバーで、いつも彼は怪しげな煙をふかしながら、いい気分で僕らを迎えてくれた。
さて、ビーチパトロールの際、カメをどうやって見つけるのか疑問に思っている人がいるかもしれない。確かに真っ暗な夜中に、フラッシュライトに敏感なカメを見つけるのは難しい。そこで、カメが砂浜に海から上がってきた時にできる体をひきずった跡を見つけるのが1番の方法である。目が暗い夜に慣れてくると水際から10メートルくらいまっすぐにのびたカメの足跡を見つけるのは容易になってくる。しかし、足跡は見つけられても前述したように多くの村人が町に卵を売るために、同じように砂浜を歩いているので、すでにカメの巣のそばには人影があることがしばしばである。そういう時は、彼らの行動を止める権限は我々にはないが、彼らの取り分の20パーセントをふ化場に寄付してもらうようにお願いする。長期間、このボランティアをやっていたこともあり、知り合いも村に増え、ビーチパトロール中にお互い全く反対のことをやっていながら、砂浜で会うと「ようタケシ何やってるんだ、カメは見つかったか？」などとあいさつをし、世間話をし、決して口論にはならなかった。こういうアルカスの村人たちにたいする態度がこのような活動を円滑に続けていくうえで非常に大切であると実感した。もう一つおかしな話で、一緒に働いているアグストの父ちゃんは実は熱心なカメの卵の収集家で、町のバーに売って小金を稼いでいる。

さて、カメの足跡を見つけてから無事に卵を収集するまでの過程はこうである。まず、跡を見つけたら、なるべく音をたてず、すぐに明かりを消す。そして静かに跡をたどってカメが今何をしているのかを調べる。卵を埋めるために穴をほっているのか、卵を産んでいる最中なのか、卵を産み終わって穴を砂で埋めているのか。もし穴を掘っている最中ならば、カメが周りの音や明かりに最も敏感な時なので、カメから離れてじっと待つ。卵を産んでいる最中ならば、カメが掘った穴の後ろから横穴を掘ってその卵をカメにごめんなさいと謝りながら持参してきたビニール袋に収集する。収集したら新鮮なまますぐにふ化場に持ち帰り、30個くらいに分けて再び埋める。その際、統計調査のために埋めた穴の番号・日付け・時間・卵数を記録する。卵がふ化するには約45～50日かかる。40日が経過した穴の上にはふ化した子カメが逃げないように筒状のネットを置く。毎朝、ふ化したかどうかを確かめるのが楽しみだった。ふ化した子カメはすぐに海に放流する。しかし、海に直接放すのではなくて、海から15メートルくらい離れた所に子カメたちを放してやり、自然な状態でふ化した状態となるべく近くしてやるという意味でそこから自分たちの力で海中へ行くようにしてあげる。この行為が詳しくはわからないが、大切なことらしい。この子カメが今度は産卵をしにここの砂浜に戻ってくるのは20～30年後だと言われている。“ジミチ”な保護活動である。
こんな感じで約3ヶ月間セッセと働き、当然、新聞やテレビなんかはないわけで、日本の総理大臣がいつの間にか代わっていたことも知らなかったし、その他のいろいろなニュースも全く入っ

てこなかったので、浦島太郎の気分をちょっとだけ味わった。
この後、9月の初めくらいからは、約3ヶ月くらいの予定でずっと南下をしながら中南米を旅行して、またグアテマラに戻ってくるという計画を立てた。このことをコラムやミリアムに話して旅行に出た。

7～グアテマラの国鳥ケツァル
ケツァルという鳥について聞いたことあるだろうか。手塚治虫の漫画「火の鳥」のモデルになったといわれている鳥である。体長は20センチくらいだが尾が長く、尾も含めると1メートルくらいになるという非常に美しい鳥である。1000メートル以上の高地の森林が生息地で、これも非常に数が少なくなってきており、実際それを見ることは非常に難しいらしい。グアテマラのコバンという町の郊外にケツァルの保護区があり、運が良ければそれが見れるという話だったので行ってみた。ケツァル保護区にそばに安宿（1泊400円くらい）があったのでそこに1泊することにした。宿のおじさんにケツァルを見られる時間帯を場所を聞いてみた。かれによると、朝6時から7時くらいの間に、宿の敷地内にある高さ30メートルくらいある木の上のほうにいつも木の実を食べにやってくるということだったので翌朝がんばって早起きして見に行ってみるとおじさんが「10分くらい前に4，5羽やってきたけど、もうどこかにいってしまったと言ってきた。せっかくきたので、どうしても見ようと思い午前中いっぱいねばってみたが、運悪く無理だった。あきらめて隣国のホンジュラスに移動することにした。

8～ホンジュラスへ
今回の中南米の旅はなるべく陸路で移動しようと思っていた。なぜなら、時間もあるし飛行機はバスよりもなんだか味気ない気がしたからだ。グアテマラからホンジュラスへ入国するには基本的には3ヶ所ある。今回僕はこの3ヶ所のうちの１つであるルートをとった。まずグアテマラシティーからバスで3時間のグアテマラで最も蒸し暑いといわれているチキムラという町に行き、そこで1泊し翌朝早朝6時のバスで約2時間半かけてホンジュラスとの国境の町エル・フロリドまでいくとそこにはおんぼろ小屋のグアテマラ、ホンジュラス両国のイミグレーションがあり、闇の両替商がたむろしている。イミグレーションではたまに賄賂を要求されることもあるらしいが、今回はなかった。簡単な質問のあとパスポートに出国と入国のスタンプを押してもらい、9月12日いざホンジュラスに入国である。しかし、ホンジュラス側の町は山をこえて15キロくらいのところにあるので、そこまで行くのにトラックの荷台に乗っていかないといけない。まず、闇の両替商と15キロ先の村までいくのに最低限のお金を両替するために両替レートの交渉をする。大金はやはり町の銀行で両替するのがよい。だいたいは彼らは外国人旅行者にはレートをぼってくる。そこをねばり強く交渉して割のいいレートで両替する。そして、その時、気をつけることが2つあって、1つは彼らの持っている計算機は巧妙に細工がしてあることがあり、たまにこっちに不利な金額になるように計算結果がでるようになるものもあること。2つめはもらったお札の間に別の国のお札やただの紙きれがはさんであることもある。この2つのことは、中南米どこの国も陸路で国境を越える場合、同じことである。無事に両替をすますと、次はトラックの値段の交渉である。これも両替するときと基本は同じ。そうやって山を越えコパン村に着いた。このコパン村郊外にはホンジュラスで最大のマヤ文明の遺跡コパン遺跡がある。翌日さっそくそこに行き、たまたまそこに来ていたホンジュラス人の子連れの家族が現地のガイドを雇っていたので彼らの好意に甘えて一緒に遺跡を回った。遺跡は広大であった。BC500年ころからこのあたりに集落ができ始め、マヤ文明は6世紀から8世紀にかけて最盛期をむかえ、そして9世紀にはいってなぜか消えていった。メキシコのユカタン半島やグアテマラのマヤ文明も同じように9世紀に消えていった。理由はいまだわかっていない。ガイドの話やそれに関する本や実際見た石作りの神殿や石碑などからかなり高度な文明を有していたことがわかる。ここではそれに関する詳細は省略する。

コパンに2晩滞在した後、カリブ海岸の町トルヒーリョに向かった。コパンからホンジュラス第2の都市サン・ペドロ・スーラまで4時間かけてバスで行き、そこで1泊し（そこはただひたすら蒸し暑く、人がたくさんおり、物騒なところだった。）、トルヒーリョ行きのバスで約8時間。そこでは、今までの僕のスペイン語を整理しようと思い、1週間ホームステイしながらスペイン語学校に通った。そこにはいわゆる旅行のオフシーズンということもあり、生徒はたった2人しかいなかっ

た。イギリス人1人となんともう1人は日本人であった。彼はここでもう2，3ヶ月勉強した後、ペルーの日系人経営の旅行会社で働くらしい。なんでこんなところで勉強しようと思ったのか聞いてみると、日本人がいそうになくスペイン語がはやく上達しそうだったからということだった。まあ、ちょっと気の毒だったが、彼もそういっていたが、お互いこんなところで日本人に会ってうれしかった。ここがまた今まで経験した中で、最も蒸し暑いところで、おまけにその時期は雨がほとんど降らず、町全体が渇水状態だった。したがって、シャワーを浴びようと思っても水が出ず、バケツ2，3杯の水を大切に使って体を洗うしかなかった。日中は暇さえあればカリブ海の海に体を冷やしに行き、しかし夜は砂浜はたまにナイフで刺されるから行くなと地元の人にいわれたので、水に浸かりたくてもがまんして、汗じっとりで横になるしかなかった。あっという間に1週間が過ぎ、トルヒーリョを出ることにした。この時僕は、はやく南米大陸に行きたくてしょうがなかった。高いお金を払って飛行機でならばホンジュラスから南米大陸、例えばコロンビアやエクアドルなどにはすぐにいけるが、中南米で航空運賃は正規運賃でしか購入できず格安運賃などはほとんどない。それに、前述したようになるべくバスで移動したかったので、南米に行くにはとりあえず、中米の一番南の国パナマまで行くしかなかった。というわけで、今回はホンジュラスとパナマの中間にある国ニカラグアとコスタ・リカは通過するだけで時間を割いて周らないことにした。中米には1番北のグアテマラからエル・サルバドル、ホンジュラス、ニカラグア、コスタ・リカ、パナマまでをつないでいるティカバス社の国際長距離バスがある。これに乗ることにした。これに乗るためにはホンジュラスの首都テグシガルパまで行かないといけなかった。トルヒーリョからテグシガルパまでは約11時間。
テグシガルパはこれといって別に何の見所もないごちゃごちゃしたまちであった。ここに長居するつもりはなかった、しかしパナマの入国には日本人は観光ビザが必要ということだったのでテグシガルパにあるパナマ大使館に行って10ドル払ってビザを買った。これが後のパナマ入国の時、僕の納得のいかないことになるのだった。ついでに日本大使館にも寄って2，3週間遅れの日本の新聞を読んだ。いろんな記事を読むのも楽しいが、意外と下の欄に載っている週刊誌の広告を見るのも情報収集として役に立った。2日くらい滞在し、一応の用事をすませるとさっさとバスのチケットを買い、翌朝8時のバスでテグシガルパを発った。お昼ごろホンジュラスとニカラグアの国境に着き、いったんバスを降り、また例のようにイミグレーションでの手続きをし、お金を両替し、またバスに乗り、その日の夕方にニカラグアの首都マナグアまで行き、そこで1泊し、翌朝6時に今度はコスタ・リカの首都サン・ホセに向かった。お昼過ぎにサン・ホセに着くと出発は夜の8時だというので、サン・ホセのまちをぶらぶらしていた。インターネット・カフェを見つけたので久しぶりに親や友達にメールを送ったりした。そのカフェの兄ちゃんにいきなり、”日本語には3種類の文字があるだろう、それはどういうふうに使いわけているんだ”と質問されてびっくりした。漢字、ひらがな、かたかなのことをなんでふつうの中米の若者が知っているのか不思議に思ったのでそれを聞いてみると中南米では今、日本のアニメが大人気なのである。たしかにどの国の民放でも”ドラゴンボール”や”らんま”などをやっており、ホンジュラスのビーチでは子供たちが”かめはめ波！”と叫んで遊んでいるのを見た。7時頃バスターミナルに戻ると、1組の日本人夫婦Hさんたちと出会った。話してみると結婚したばかりで、仕事をやめて、今1年間くらいの予定で中南米を旅行しているとのことだった。彼らは南米大陸の最南端フエゴ島までいくらしい。僕も行きたかったけど、お金が無い。南米大陸に入るまでは一緒に行くことにした。夜8時のバスに乗りパナマシティーに向かった。僕の前と横の席にはパナマに仕事の用事で行っているという一見お金持ちのような品の良いエルサルバドルの3人のおばちゃんたちだった。これまでの話などいろいろ話をし、にぎやかな人達だった。エル・サルバドルに寄ることがあったら、是非泊めてあげるから連絡しなさい、といって住所と電話番号までもらった。とても親切な人達だった。そして、翌朝6時頃、コスタ・リカとパナマの国境に着いた。コスタ・リカの出国は何の問題もなかった。が、パナマの入国の時、イミグレーションの係官がこの後パナマを出国する時の飛行機かバスのチケットと外国人用のツーリストカードが必要だと言いだしたのだ。出国用チケットはバスの運転手に話したら、とりあえず、パナマからコスタ・リカへのチケットを売ってあげるからそれをパナマのバスターミナルに後から行って払い戻しをすればいいことを教えてくれた。さて、ツーリストカードについてだが、自分はちゃんとホンジュラスのパナマ大使館で10ドル出して買ったパスポートに貼ってある観光ビザを見せて説明したが、向こうは5ドル出してツーリストカードを買えと言う。ビザかツーリストカードのどちらか一方持っていれば入国できるはずだったので、ねばって交渉してみたがだめだった。あっちの言い分は”大使館は大使館”、”こっちはこっち”という理不尽なものだった。
なんとか無事にお昼頃にやっとパナマシティーに着いた。パナマ運河に架かっている橋を通り

ながらパナマシティーの高層ビル群が見えてきた。なんとなく香港の風景に似ている。パナマはパナマ運河あってのパナマである。そのため他の中米諸国に比べるともちろん経済力があり町も一見先進国のようである。ここも相変わらず蒸し暑い。さっそく3人で安宿地区へと向かった。宿を探しながら3人で歩いていると、自分を指差しながら「オカムラ！オカムラ！」叫びながらこっちに向かってくるパナマ人がいた。よく見たらナイナイの岡村にそっくりだったので爆笑してしまった。なんで岡村を知っているんだと聞くと昔会った日本人にそう言われたんだという。ああ彼の写真をとっとけばよかった。結局彼の紹介してくれた宿に泊まることにした。その宿にはカナダ人が2人、オーストラリア人が1人、チェコ人が2人いた。このチェコ人2人のうち1人が悲惨で、コスタ・リカで着替えなどの入った荷物全部とお金、カード類一式盗られ、おまけに盗難などの保険にももちろん入っておらず、南米に行くにも行けない状態だった。それでも彼はあきらめずにパナマで英語教師（さいわい彼は英語が上手かったので）の仕事を探して、また稼いで南米に行くと言っていた。僕ら3人はここパナマには長居すつもりはなかった。南米大陸にここから行くには陸、海、空路があるが、陸路はジャングル地帯でまだゲリラなどがおり、そこを通ることは自殺行為であったし、船は貨物船しかなく交渉しても必ずしも乗せてくれるともかぎらないらしかったし、それにうわさでパナマでは格安チケットが手に入る可能性があるということだったので、3人でパナマの旅行会社を5，6件回った。しかし、結局パナマから出国するぶんについては格安チケットなんかは存在しないことがわかったので、1番近いコロンビアまでのチケットを買った。チケットを買うともうパナマ運河を見に行く以外パナマシティーでは何も用はなかった。さっそく翌日、パナマ運河のミラフローレス水門に行った。そこでは運河を通過する船のために、水面を上げたり、下げたりする所で次から次に大型の貨物船やタンカーが通過していた。この通行料だけでもパナマ財政にかなりの貢献をしているようだ。

9～南米大陸へ

10月2日、ようやく中米を抜け出た。コロンビアを旅行した人に話しを聞くと、
コロンビアは景色がきれいで、人も親切だった、と言う話を多く耳にしていたけども、よくない話も多かったし、僕ら3人はコロンビアにあまりいいイメージを持っていなかったので、素通りすることにした。パナマシティーからコロンビアの首都サンタフェ・デ・ボゴタにまず行き、そこでエクアドルの国境に近い町カリ行きの飛行機に乗り換えて、まずそこで1泊して翌日はエクアドルとの国境沿いのパストと言う町で1泊し、そのまた翌日にエクアドルにバスで入国する計画を立てた。カリはコロンビアで3番目に大きい町でメデリンと並んでかつてはコロンビアマフィアの活動拠点だったが、1995年に大ボスたちが大量に逮捕されて以来、昔ほどではないという話だったが宿に着くなり、主人にいきなり「そこの橋から向こうは刺されるから昼間でも行くな」と言われてすっかりコロンビアにびびってしまった。パストで1泊し、乗合バンで国境まで行った。ここで不思議なことが起こった。バンには僕ら3人の他に、コロンビア人7，8人乗っていたがこのバンはまっすぐエクアドル側のイミグレーションまで行ってしまった。彼らはコロンビアの出国手続きはしないでよかったのだろうか、いまでも疑問に思う。とりあえず、僕らは周囲の人にここはエクアドルであることを確認して、これは不法入国だよねとかぶつぶつ言いながら慌てて歩いてコロンビア側のイミグレーションに戻った。そして、ようやくエクアドルに入国し、さっそく首都のキトを目指した。キト行きのバスに乗るためにトゥルカンという町に行った。その町に着くとキト行きのバス各社の客引きが大勢やってきた。誰も信用できそうになかったので、実際にバスを見てから決めることにした。彼等客引きも必死で、値段も相手のバス会社より少し安くするからとか他のバス会社の悪口を並べたり、しまいにはあるバス会社ではオフィスの鍵をしめてもういいから僕らのチケットを買えとか言い出すなんとも横柄な者まで現れた。なんとかバスも決め、4、5時間かけてようやくエクアドルの首都キトに着いた。キトでは僕は4、5日の滞在の予定にしようと思っていた。Hさんたちはキトからガラパゴス諸島に行ってから南下するということだった。キトはユネスコによって世界文化遺産に指定された街で特に旧市街は歴史的建造物が多く保存されており、雰囲気が非常にいい街だった。キトからバスで北に30分くらい行くと赤道が通っていてそこが赤道公園としてきれいに整備されており、僕らは3人でお決まりの赤道をまたいだ写真などを撮った。

Hさん夫婦と日本での再会を約束してキトで別れて、僕はペルーに向かうつもりで南下した。しかし、ペルーに入国する前にちょっと寄りたい村があった。それはビルカバンバという村でその小さな村には100歳以上の老人がぞろぞろいるという。キトからロハという街まで行き、そこでビルカバンバ行きのローカルバスに乗り換える。そのバスには近くの村々から買い出しに来た人たちが麻袋などに果物や野菜をいっぱいにして乗り込んでくる。その荷物を車掌が器用に

バスの屋根の上にどんどん積んでいき最初のほうに屋根に積んでもらった僕の荷物はどんどん野菜などに埋もれていき、なかには羊2頭をつれてきた人がいてそれをどうするのか見ていたら車掌がロープを羊の首に巻き付けバスの屋根の上から暴れる羊を無理矢理ひっぱり上げていた。慣れた様子であった。さてそのビルカバンバでは日曜日のミサには村中の老人たちが教会に集まるという話だったが残念ながら僕が行ったのはウィークデーだったので老人たちは家にとじこもっていたのか外ではほとんどそれらしき老人は見かけなかった。ただ露店で不老長寿のジュースなるものを売っていたので話の種にと思って試そうと思ったが汚いコップに沼の水みたいな液体が入っており、グアテマラでの二の舞いになりそうだったので、とりあえずやめた。

ビルカバンバを立って、ペルーの国境に1番近い街マチャラへ。エクアドルの長距離バスで山越えをするときなどは山道の入り口にほとんどの場合軍隊の駐在所兼検問所があり、そこでバスに兵士が乗ってきてIDカードの提示を求め、外国人観光客はいったん外に降りて、駐在所でパスポートを見せ、通行帳のようなノートに名前と国籍をパスポート番号を書かなくてはいけなかった。こんなことが毎回あるのでこれは面倒だった、しかしよく考えるとこのような国では治安維持のために非常に重要な行為である。

マチャラは蒸し暑くて汚いといった印象。

10～ペルー入国

マチャラからエクアドルのイミグレーションがある国境までバスで行き、とりあえずエクアドル出国の手続きを済ませる。そしてペルー入国の手続きをしようとペルーの国境を探したがそのまわりにはそれらしきものがない。すると闇両替え屋が寄ってきたので、そのことを聞いてみるとここから1キロくらい先にあるという。それをそのまま信じるのもちょっとと思い、エクアドルのイミグレで聞いてみるとほんとにそのとおりだった。そしたらさっきの両替え屋がまた寄ってきてそれみろ俺が言った通りだろうと言ってきた、そして俺の知り合いの車でペルーの国境まで送ってやると言ってきた、その辺に何台もタクシーが待機していたのでどうせタクシーの運ちゃんもグルになって客をつかまえているんだろうと思っていたら、全くそのとおりだった。タクシーに乗ると例の両替え屋まで乗ってきて結局ペルーの国境まで着いてきた。なんだか賑やかな市場のような所で降ろされた。ここからペルーだからこの車は先には行けないということだった。とりあえずここはもうペルーなのであまりにもしつこいその両替え屋で今日1日の必要最低限の金額を両替えすることにした。やっぱりでたらめな両替えレートをふっかけてきたので今日マチャラで買ってきた朝刊の経済面のペルーの通貨のレートをこれでどうだと言うような感じで見せて両替えをした。彼にペルーのイミグレはどこかを尋ねるとここから2キロくらい先だという、100メートルくらい先にタクシーとかいっぱいいるから行ってみろとのことだった。荷物を担いで歩いていると別のおやじが寄ってきてイミグレまでタクシーで送ってやると言ってきた。値段は20ソル（約7ドル）。高いと思ったのでもう少し様子をみることにした。しばらく歩くと、橋が見えてきてそこにはタクシーや荷台を取り付けたバイクなどでたむろしていた。荷台を付けてないバイクも何台かいた。ためしにバイクに乗っている兄ちゃんにイミグレまでいくらで連れていってくれるか聞いたら2ソルだという。速攻でそのバイクで行くことにした。重たいバックパックを担いだままそのバイクに2人乗りした。

国境の街トゥンベスに着いて、その日のリマ行きの夜行バスに乗った。次の目的地はアンデス山脈中腹の街ウアラスである。リマの400キロ手前のチンボテという街で途中下車して、ウアラス行きのバスでひたすらアンデス山脈を8時間かけて上って行く。ウアラスは標高約3000メートルあたりにあり、アンデスの山々の登頂を目指す登山家たちが世界中から集まっており、もちろんアンデスの美しい雪山を見るためだけにやって来る旅行者もたくさんいる。僕が泊まったホステルの部屋にはスペイン人の本格的な登山家2人、1年間南米を旅しているドイツ人2人、2、3週間ペルーを旅行しているオーストラリア人1人だった。

ウアラス周辺にはプレインカ文明をいわれるインカ文明以前の文明の遺跡がいくつかあり、その1つであるチャビン遺跡に同部屋の3人と一緒に行ってみた。そこも中米のマヤ文明と同様に精巧な石作りの神殿や洪水を防ぐための用水路などここチャビン遺跡でなんと70年近くガイドをやっているというおじいちゃんの説明を聞きながら見学した。

また氷河も多く散在しており、パストルーリ国立公園内にある長さが100メートルくらいある氷

河はその上を歩いたりできるというふれこみでウアラス旅行会社がガイド付きツアーをやっていた。同じ3人とそこへも行ってみた。まず氷河のある標高5000メートルくらいの所までバスで上って行く。公園に着くと30分くらいかけて氷河のある地点までゆっくりと歩いて登って行く。5000メートルともなると息切れと頭痛がひどくなる。氷河に辿り着くと僕はてっきりなだらかな斜面を想像していたが、実際にはひどく急斜面で設置されているロープをつかまないと登れないような斜面であった。何人も足を滑らせて僕らの横をお尻で下に滑り降りて行った。ペルーとボリビアではインカの時代から慣習的にコカの葉を乾燥させてコカ茶として飲んだり、その乾燥させた葉をガムみたいにして噛む習慣があり、今現在もそのようなコカの葉の使用はペルーとボリビアの国内のみでは合法で、食堂では食後にコカ茶を飲むし、道ばたでは噛むための乾燥させたコカの葉が袋につめて売ってある。とりわけコカ茶はアンデスのような高地での高山病の予防に効果があると言われており、このツアーでもガイドがしきりにコカ茶を飲むように言っていた。果たして効果があるのかはよくわからないが味はハーブティーみたいでけっこう美味しい。噛むほうはただのにがい葉っぱだった。

同部屋のドイツ人とオーストラリア人と別れてどうせこれから日程こそ違うがだいたいの行き先などは似たようなものなのでまたどこかのホテルで会うだろうと言って一足先にウアラスを立ってリマへ向かった。（実際この後彼等とまたばったり会うのだが）リマに着くとようやく今回の南米で最も楽しみにしていた”ナスカの地上絵”や”空中都市マチュピチュ遺跡”が真近に迫ってきた感じがしてきた。リマではあまり遠出もせず、インカ時代の遺品などが豊富にある2、3の国立の博物館にぶらぶら出かけたり、国家宮殿では大統領衛兵の交替式が毎朝11時に行われており、そこにフジモリ大統領がたまに宮殿から顔をみせるということを聞いたのでちょっと期待して行ったが、残念ながら軍の総帥が代わりに出てきた。見物客の中のペルー人にフジモリは出てこないのかと聞いてみると、昔はいつも出てきていたらしいが最近は暗殺など警備面を気にしてかほとんど出てこなくなった嘆いていた。

リマに3日滞在した後、いよいよナスカ村に向かった。リマから長距離バスで約8時間かかるが途中で交通事故で1本道が塞がれ4時間くらい全然先に進まず、着いたのが夜の8時か9時だった。宿があるか心配だったが、いざ着いてみるとさすがはペルーでマチュピチュと並ぶ観光地ということもあり、ホテルの客引きがバスを降りるなり僕の荷物を頼んでもないのにいきなり運び、いいホテルを紹介してやるという、バスの移動でその日はかなり疲れていたし値段もそんなに高くないホテル（10ドルくらい）だったのでその客引きに連れて行ってもらった。ホテルに着くと明日のナスカの地上絵のセスナ遊覧の予約をしてやるという。いくらだと聞くと、40ドルだという。リマのホステルでナスカから来た旅行者に一応聞いていた値段と同じだったし、ナスカではどの旅行会社で予約しても40～50ドルだということも聞いていたのでそこで予約した。ただ明日は1日ゆっくりしたいということもあって明後日の遊覧の予約をした。ナスカ村は砂漠のど真ん中にあり、これといった産業もなく、この地上絵の観光収入が唯一の外貨の収入源なので、かなりシステマティックに観光するようになっている。ナスカ村で1つ気になったことがある。スペイン語のamigo（アミーゴ）という言葉は日本語では友だちというような意味だが、スペインではどうだか知らないが中南米では相手に話しかけたり呼びかけたりするときに”アミーゴ！”と言うことがしばしばある。しかし、ナスカ村では日本人観光客もシーズン中はけっこう来るみたいで、日本人を見かけるとどの人も例外なく”アミーゴ！”とは言わずに日本語でにこにこしながら”トモダチ！”と叫んで来る。まあ意味は同じだろうけれども、日本にはそんな習慣はないし、そのように”トモダチ”と呼ばれると”私はあなたの友だちです。”と言っているように感じてしまい、”私はあなたの友だちか？”と思ってしまい、なんだか変な気持ちになってしまった。

遊覧の当日、宿のおやじがセスナは揺れるので朝飯は食べずに行けと言う。そんなに揺れるのかと不安になったが、実際にはほとんど揺れはなかった。4人乗りのセスナでパイロットが約30～40分くらい10個くらいの地上絵の1つ1つの上を飛んでくれてあれがクモの絵だとかあれがハチドリの絵だとか説明してくれる。最初は地上絵を探すのに苦労していたが徐々に目が慣れてきてすぐに見つけれるようになった。ナスカの地上絵の真偽については様々な議論があるが実際にこの目で見るとそういう問題ではなく、1つの芸術作品としてすばらしく評価できるのではないかというのが僕の感想である。

地上絵を見たその日の夜行バスでアレキパという町へ移動した。アレキパは2日だけ滞在す

ることにした。アレキパに早朝6時に着き、そのままタクシーで宿探しに行った。運良く最初にあたった宿が雰囲気も宿の主人も親切でそこに泊まることにした。荷物を部屋に置き宿の宿泊者ノートに名前とパスポート番号を書きに行ったら、宿の主人がコップとお酒を持ってきて、これはアレキパの地酒でおいしいから飲めという。2人で乾杯をして、これがものすごく強い酒で夜行バスでかなり疲れていたのか昼すぎまで部屋で寝ていた。ちょっと何か食べようと思い外に出ようとすると、また宿の主人が酒を持ってきた。さすがにすきっ腹にそのお酒はこたえるからというと、このソーダで割ってから飲めばだいじょうぶだと言ってしきりに勧める。しょうがないからそのソーダで割ってまた2人で乾杯をしてアレキパの町にでた。そこで品の良さそうな日本人の老夫婦に会った。なんとナスカからアレキパまでの夜行バスでカメラや今まで撮ったフィルムやガイドブックなどを盗まれたらしい。幸いお金などの貴重品は身に付けていたので無事だった。彼等は定年退職後に世界中いろんな所に(なんとイラクや北朝鮮などへも)旅行に行っているらしく、このようなことには常に気を付けていたのに、一瞬のすきがあったとくやしがっていた。これが旅行の始めのほうだったらもっと大変だったかもしれないが、もうあとはマチュピチュ遺跡に行ってから日本に帰るだけですから旅行の最後のほうでよかったですよと言っていたがほんとに気の毒であった。

アレキパのバスターミナルでクスコ行きの夜行バスのチケットを買い、クスコへと向かった。約13時間の長旅である。しかも僕の乗ったバスにはリマの女子高の修学旅行の生徒達30人くらいが乗っていて一晩中バスの中で大騒ぎで女子高生はどの国も似たようなものであった。隣の席に座っていたのはアンデスのインディアンのおばちゃんで彼女に話しかけられても彼女はスペイン語は話せず、現地語であるケチュア語しか話さないので何を言っているのか全く分からなかった。周りの席のスペイン語とケチュア語両方話す人たちに通訳してもらってようやくコミュニケーションがとれた。南米は一般的にスペイン語を公用語としている国が多いがその国でもやはり少なくなっているとはいえ原住民族も残っており、もちろん彼等は彼等の言語を持っている。そんな南米の一面を垣間見たような気がした。

クスコは標高約3600メートルの高地にあり、高山病になる旅行者が多い。インカ時代には南米の中心都市として栄えた所である。朝早くクスコに着き宿を探そうと4軒まわったが全て満室で、五軒目のカサグランデ(大きな家という意味)という宿でやっと空部屋があった。3600メートルの高地を重い荷物を持って宿を探し歩くのはけっこうな重労働で、やっと泊まる所を確保できてほっとしていると、そこの宿の人が親切にも例のコカ茶を持ってきてくれた。けっこうこのコカ茶が好物になってしまった。街ではコカ茶のティーパックまで売ってある。これも国外には持ち出せないのだからほんとに残念だ。カサグランデの造りはちょっとした中庭の周りに二階建ての建物がぐるりと囲んでいる。なので、南米を車で旅している人たちが駐車スペースがあるということでよく泊まりにくるらしい。僕が泊まった時もフォルクスワーゲンのワゴンがあった。スイス人3人組だった。ヨーロッパからアルゼンチンまで貨物船で車を運んできて南米を縦断しているらしい。中を見せてもらったがキッチンを付けて、かなり快適そうだった。

3日間、ゆっくりクスコで過ごし、いよいよマチュピチュに向かうこととした。クスコからマチュピチュに行く方法はだいたい普通は3つある。1つは観光列車に乗って行く。2つ目はローカル列車に乗って行く。3つ目はインカ道というアンデス山脈に残っているインカ時代の山道を現地ガイドと共に3、4日かけてのトレッキングでマチュピチュに行くことである。観光列車はローカル列車の10倍の値段だったし、ローカル列車は1等車だったらスリや強盗もないという地元の人の話だったのでローカル列車の1等車で行くことにして切符を前日に駅まで買いに行った。しかし、行った時間が遅かったのか1等の切符は売り切れでなかった。仕方なく2等の切符を買った。翌朝6時発の列車だった。2泊分の荷物を持って、残りは宿に預けて出発した。1等車と2等車はどう違うのかといえば、1等車は座席分の人しか車内に入れないが2等車は誰でも切符を買えば車内に入れるのだ。始発のクスコでは2等車両内はある程度混雑していた、しかし、2駅、3駅と進むごとに遠い村から買い出しに来た人たちであろうか野菜、じゃがいも、とうもろこしなど食糧をいっぱいに詰め込んだ麻袋をたくさん車内に運び入れだして瞬く間に通路、荷だな、座席の間などが人と荷物でいっぱいになり、僕の頭上には荷だなに結び付けた麻袋がさがっていて、これをどけてくれと言っても他に置く場所がないと言って一蹴されてしまった。車掌は座席の上や荷物の上を歩きながらやって来たくらいだ。列車はまずクスコから山を越えなければならず、人間が走っても追い付くような速さで5、6回方向転換をジグザグ走行でしながら1時間くらいかけてやっと山越えができた。だから1時間ずっといつまでたってもだいたい同じようなクスコの町の風景のままでこの列車調子悪いんじゃないかとずっと思っていた。約4時間かかってマチュピチュの1つ前のアグアスカリエンテスという村に着いた。マチュピチュを観光する

人の多くはこの村に1泊して翌朝早くバスでマチュピチュまで行く。僕もその村に泊まった。

いよいよ、マチュピチュ。同じ宿だったアメリカ人と一緒にバスに乗り、30分くらい急坂をのぼりマチュピチュの入り口に着いた。世界史の教科書の写真と全く同じ風景が目の前にあった。切り立った山のてっぺんに石作りの神殿や集落や段々畑が広がっている。2600メートルくらいの高地なので雲が頻繁に遺跡を覆い隠す、と思ったら一瞬にして晴れ上がり雲の隙間から遺跡群が突如として現れてくる。それがいかにも神聖な場所の演出のように感じた。意外とそこは広く、全然飽きずにそのアメリカ人と半日以上そこで過ごした。

翌日クスコへ戻り数日またゆっくりと過ごした。インターネットカフェでメールをチェックするとグアテマラのコラムからもメールが着ていた。内容はあまりいいものではなかった。覚えている方もまだおられるだろうか、10月終わり頃中米のカリブ海沿岸を直撃した”ハリケーン ミッチ”のことだった。実際にはホンジュラスが最も被害が大きかったようで国の文化が10年後退したと言われる程の状態でアメリカの軍隊や日本の自衛隊なども復旧活動の援助に参加したようであった。グアテマラもかなりの被害を受けて政府発表の死者数が毎日増えているとのことだった。ホンジュラスには9月始め頃滞在していたのでもしそれが1ヶ月遅かったらと思うとぞっとした。

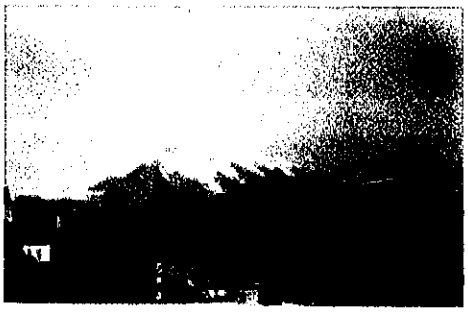
チチカカ湖へ向かうためにチチカカ湖岸の街プーノ行きの列車のチケットを買った。クスコからプーノまでは約10時間半、アンデス山脈をひたすら走り、非常に壮大な景色を眺めながら進んで行く。冬場は毛布でも持参しないとけっこう車内は冷え込むという話だったが、その頃はちょうど夏だったので全然寒くなく、むしろ暖かいくらいで、景色がいい所ではたまに列車が止まり、非常にゆったりとした列車の旅だった。チチカカ湖は標高3820メートルに位置しており世界で最も高いところにある湖である。ペルーとボリビア両国にまたがっており、国境線が湖の真ん中に通っている。プーノはチチカカ湖岸の町では一番大きい町でそれだけにプーノの港は生活廃水が垂れ流しで藻が大量発生していて、汚臭がただよっていた。プーノに旅行者が集まる理由はチチカカ湖の浮き島（ウロス島）に生活する民族を見るためだ。湖に生えているアシを集めてバスケットコートくらいの足場をつくりその上で生活しているのだ。しかし、かなしいかなウロスの完全に純粋な民族は全く残っていない。かろうじてウロス島での原始的な生活は少しは受け継がれているようだが、生活手段としてもはや自給自足の生活は現代では難しく、我々のような観光客からの観光収入で生活しているようだった。彼等の生活はなんだか我々のための見世物化していたし、アシで作った彼等の生活の場である小屋の横にはサテライトのアンテナが立っていた。これを僕らが雰囲気がくずれて期待外れだといろいろ言う権利はどこにもないと思う。彼等も彼等で生活していかないといけないのだから。でもちょっと残念。

その翌日、プーノからボートで約3時間のところにあるタキーレ島に行った。この島ではちゃんとした自治が確立していて島民の団結は強く、島の入り口に島の酋長たちの小屋があり、旅行者などのいわゆる外部のものがタキーレ島へ入島するときはそこで登録しなければならない。島民は普段の生活でもカラフルな民俗衣装を着て、ケチュア語という現地の言葉をしゃべっている。民俗衣装で特徴的だったのが、男性島民のかぶっていた綿の三角帽で、正確には忘れたがその帽子の先を頭の前後や左右のどちらに倒しているのかで成人なのかそうでないのか、既婚かそうでないのかを区別しているという、だからどうしたと言われそうだが、面白い習慣だと思いません？タキーレ島の辺りの水はプーノとは全く違い透明度が抜群によろしく、透き通った青々とした水面をずっと向こうまで眺めているとペルー領のタキーレ島からボリビアの山々がうっすらと見えてきた。島の一番高いところからそのような風景を眺めていると遠い水面には風が吹いているのだろう水面上に風による波が模様のように湖面上に出ていて、辺りはシーンとしており音のない世界のような錯覚を一瞬覚えた。誇張しすぎだとおもうでしょう、まあこれが本当なんです。

11～ボリビア入国

プーノからボリビアの国境の町コパカバーナまではそのルートを利用する旅行者が多いことも

あってかけっこうバスがたくさん走っておりスムーズに移動できた。コパカバーナではチチカカ湖のちょうど真ん中くらいにある太陽の島と月の島がお目当ての人が多い。
この島にはインカ時代の遺跡が多数残っており、特に太陽の島はインカ時代の太陽などの世の様々な実在の誕生の地と言われている場所でもある。でもここは個人的にあまり面白くなかったので省略。



次はボリビアの首都ラパスを目指した。コパカバーナから例によってアンデスの山々を見ながらバスで3、4時間。ラパスの地形はちょうどすり鉢状で盆地のような感じである。ラパスは標高約3700メートルに位置し空気が薄いのでそのすり鉢の底の方、つまり高度が低く空気が濃いほど高所得者層の居住地域で、すり鉢の上の方ほど低所得者層の居住地域と言われている。冗談のように聞こえるが、実際10年程前まではすり鉢のてっぺんにはいわゆる貧困層の集まりの地区がラパス郊外の1地区としてあったのが、今現在はそこがラパスとは別の1つの巨大なまちになってしまいその名もエルアルト(日本語でいうと高い所)である。コパカバーナからバスで来るとまずエルアルトを通りしばらくすると突然目の前にまさにすり鉢状のラパスが現れてくる。コパカバーナ方面から来たたいていの人は最初エルアルトをラパスと思ってしまう。僕もその1人だった。

ボリビアは南米で最もハマル人が多い所らしい。ボリビアだけで3、4ヶ月くらいかけて旅する者も多い。でも今回は時間も金も足りなくなってきたのでここラパスを最後に隣国チリに行くことにした。ラパスでは今回初めて日本人宿に泊まった。中南米には各国に最低1つずつは日本人宿があるみたいだ。そのほとんどはその国に住みついた日本人が経営していて、宿泊客も日本人のみ。今まで日本人宿に泊まったことがなかったのは別に避けてたわけではなく、住所を知らなかったからだ。地球の歩き方には載っているみたいだけど僕は現地でガイドブックは買っていたのでそれは使ってなかった。ペルーで会った日本人にラパスの日本人宿のことを聞いていたので今回はそこへ泊まることにした。

その宿では久しぶりの日本食を毎晩夕食で出してくれた。他に日本人の宿泊客が4人いた。皆旅行の仕方は様々だった。その宿に1番長くいた60歳くらいのおじさんは数十年前にアルゼンチンに移住して働いていたのだか今年日本に帰ることを決心して奥さんだけ先にアルゼンチンから日本に帰って彼だけちょっと南米を旅行してから帰る予定だったがアルゼンチンからボリビアの国際空港に着いて空港の外に出たとたんにスリに会い現金やらパスポートやら貴重品諸々を盗まれ一文無しになりこの宿に駆け込んで主人に助けを求めたという話だった。日本の奥さんに送金を頼んでそのお金がボリビアの銀行口座に送られるのを待っていると言う、しかし奥さんが送った日付けから10日たってもまだこちらに送金されてこないらしく彼は毎日外に出て使うお金もないので毎日がひもじさといらだちの連続だったようである。二十歳くらいの女の子はチリでスペイン語の語学研修をしていて
その休暇にボリビアやペルーを旅行していると言う。30歳くらいの男性は大手製薬会社をやめて、ブラジルのどこか忘れたが大学の蛇毒の研究所に留学するらしくその前にちょっとボリビアやペルーを旅行するらしい。そしてもうひとりはなんと自転車野郎。彼はまずアメリカを自転車で縦断し、そして飛行機でアメリカからペルーのリマまでやってきてリマからここまで僕がリマからここまでとった同じルートを自転車でやってきたといいう。アンデスの山越えとかどうしたの？と聞くとテント持ってるんで食糧を買い込んで野宿しながら越えたと言い、その後の計画を聞くとさらに驚いた。彼はこの後チリ、アルゼンチンと南下し、アルゼンチンからアフリカに渡りアフリカを自転車で走りそのままヨーロッパも走り、日本に帰るという予定らしい。相当の変わり者。彼いわく、何日間も山越えをしていると洗濯するのがめんどうになるらしく、パンツははかずにノーパンで自転車をこいでいた方が洗濯の手間が省けるらしい。ただ、その欠点はパンツ1枚分減るだけでサドルがあたる部分の皮膚の擦れ具合が非常に大きくなるらしい。ノーパンも一長一短である。ボリビアからチリに行くにはまたアンデス越えをしないといけないねえという話をしていたらさすがに彼はもう一度アンデス越えをするのはつらいらしくとりあえずラパスからチリのアリカという町まではバスに乗ると言っていたので、ちょうど僕もアリカまでいくつもりだったので一緒に行こうということになった。ラパスでは彼等と5日くらい過ごした。ボリビアはアルパカのセーターとフォルクローレという民俗音楽が有名で、アルパカのセーターは日本の半額以下の値段でも手に入る。フォルクローレは主にケーナやサンポーニャというたて笛を使う音楽で素人では吹いてもなかなか音すらだせない。ちゃりんこの彼はサンポーニャにかなり関心をよせ

楽器屋を何件かまわり値切り倒して買っていた。僕はフォルクローレのCDを探しにCD屋をまわり店員にお勧めを5、6枚出してもらい全然知らないので全部聞いてみたいとお願いしたら全部ラジカセで試聴させてくれた。それにしてもラパスは3700メートルの高地でしかも町のほとんどが急な坂ばっかりなのでちょっと歩くだけでも疲れる。ボリビアは南米の中で純血インディアンの人口割合が50パーセントと最も多い。またラパスやコパカバーナのような高原都市ばかりではなく、ボリビアの北東部は南米でブラジルと並んで最も密なアマゾンのジャングル地帯だし、南部は温暖な地域であり、一般的にはコカインのイメージが強いが実はそうではなく多様性を持った国のようである。ラパスにはたった数日しか滞在しなかったがそんなに多くの旅行者をなぜこの国が惹きつけているのかなんとなくその場の雰囲気でわかるような気がした。

チリに移動する前日に2人でバスターミナルでアリカ行きバスの数社の窓口をまわりバスの善し悪しをバスの写真を見せてもらい朝6時半発のA社に決めた。切符を買って時間と乗り場の番号を確認した後窓口のおばちゃんが荷物が多いようなら早朝はターミナルは泥棒が多いから今日のうちに荷物を荷物置き場に保管しといてあげるよ、と言ってくれたが預けるほうがよっぽど不安だったし、彼の自転車は分解してコンパクトにでき自転車用のバッグに収納できるということだったのでそれは断った。しかし、翌日にこのことを後悔することになろうとは。

出発当日の早朝五時半に宿を出てバスターミナルへと向かった。早朝だというのにもう人で混雑していた。自転車の彼はけっこう大荷物を抱えていた、自転車の入ったバッグ、テントなどのキャンプ道具のバッグ、衣類のバッグ、カメラなど貴重品の入ったバッグ。
僕は衣類やその他諸々をいれたバックパック1つを背中に、カメラや貴重品をいれたデイバッグを正面に背負い、彼の荷物を1つ持ってあげた。2人でアリカ行きのバスを探していたがなかなか見つけられない、荷物も多くて動き回るのも大変だ。すると、ある1人の男がどこに行くんだと尋ねてきた。僕らがアリカだというと、俺もそうだと言い、バスはこっちだと言う。なんの疑いもせずその男について行った。ここだと言うのでとりあえず荷物をおろしそのバスが本当にアリカ行きかどうか確かめたかったので彼に荷物を見張っておくように頼んで車掌みたいな人がいたので聞いてみると確かにアリカ行きであった。
僕が荷物の所に戻ると今度は別の男が切符を見せてみろと言ってきた。まず僕が先に見せた。うん、間違いないといってその男は切符を返してくれた。次に彼が切符を見せた。これも間違いないと返してくれた。そして切符を財布にしまって2人で地面に腰をおろしたその瞬間、彼があっと叫んだ。どうしたのと聞くと、カメラや貴重品を入れた彼のバッグがないと言う。その時にはもうさっきの2人はいなかった。慌てて彼は2人を探しに走って行った、もう遅かった。出発15分くらい前のことだった。たぶん、あの2人以外にもう1人いたはずである。切符を見せてる間にそのもう1人が後ろから取っていったに違いなかった。僕はデイバッグは背負っていたが、彼はその時にかぎって床に置いていた。あんなに泥棒に警戒していたのに、一瞬のすきだった。彼も認めていたが、見事な盗みっぷりだった。全く気付かなかった。盗まれた物はカメラ、今まで南米で取ってきたフィルム全部、コンタクトレンズ、ラパスで買ったサンポーニャとフォルクローレのCD、そしてなんと自転車のあるパーツやねじであった。ボリビアに残るかチリに行ってこれからのことを考えるか迷っていたがチリに行って考えることにした。

しかし、その日の不運はもうひとつあった。アリカ行きのバスに乗り、バスはラパスからエルアルトまでの坂道をのぼっていた。しかし、どうもバスはのろい。自転車にまで追い抜かれていく。とうとう坂の途中でエンストして止まり、運転手が下にもぐってエンジンを点検しだした。30分くらいたったころある乗客が別のバスを呼べ、と言い出した、これには他の乗客みんなも賛成し、携帯電話を持っていた乗客がバス会社に電話をして約1時間後にやっと臨時のバスがやってきた。これでやっとボリビア出国だ。

12～チリ入国

当初はチリまで行かずにボリビアまでで南米の旅行は終わりにしてグアテマラまで戻る予定だったが、ちょうどペルーにいるころ大洋漁業に勤めている親戚からチリの首都サンチアゴにある大洋漁業の南米支店に連絡してあるのでもしよかったら行ってみたら、という連絡があった。せっかく隣国まで来たのでこの際だと思いサンチアゴではお世話になることにした。

チリに入ってまず気がついたことは他の中南米の国とはまるで違い町並みがきれいで先進国のような感じがすることだった。たしかに他の南米諸国に比べると少しお金持ちのようである。人口の大半はメスチソという混血でドイツ系移民もかなり多く、南米のインディアンは他の国に比べると少ない。それにこれは大洋漁業の人から聞いたことだがチリは階級意識が高いらしく、昔日本からペルーやブラジルに移民が行っていた頃、南米ではチリとベネズエラがアジアか

らの移民を断固として受け入れなかったという。そのような歴史的な事実があるからだろうか、それとも勘違いなのか、僕もなんとなくチリに入ってからたまにそういう視線を感じることがあった。

ところでアリカではまずやらないといけないことがたくさんあった。彼の自転車の旅をこれからどうするかだ。カメラやフィルムはまずあきらめるしかなかった。幸いにもお金やカード類は身に付けていたので無事だった。問題は自転車のパーツとネジ、それにコンタクトレンズだ。パーツやネジは探せばチリでも同じものはありそうだったのでとりあえずアリカで探すことにした。コンタクトはさすがにチリでまた作るわけにはいかず、日本に連絡して新しく作ってもらいそれをサンチアゴの日本大使館に送ってもらうことにした。在外の日本大使館では基本的に郵便物の受け取りができるから長期の旅行などでは便利である。自転車のパーツをアリカで探しまわったが、結局なかった。僕らは何も見どころのないアリカは出ることにした。彼は日本人宿のあるビーニャデマルという町へ、僕はサンチアゴへとそれぞれ向かった。彼はどうしてもアフリカまでは行きたいと言っていたし全然落ち込んだ様子も見せなかったし、いつもプラス思考のいいやつだった。ちょうど同じ年代だったし、一緒に飲んだり、街をうろうろしたり短い期間だったが楽しかった。アフリカまで本当にかんばってほしい。

さて、アリカからサンチアゴまではバスでなんと約22時間。バス会社は5、6社あり、しかもバスのグレードも3段階あった。一番いいのはサロンカーマと呼ばれているもので座席数が30席くらいだったと思うが横に3席ずつでゆったりと座れてしかも足元が広く寝る時は座席をベッドみたいに倒して寝ることができ、もちろんトイレ付きで簡単な食事やドリンクもついて至れり尽せりである。2番目にいいのはセミカーマというもので日本の横4座席のトイレ付きの長距離バスみたいなものでただし食事サービスはない。もう1つはいわゆる普通のバスだ。おもいきってサロンカーマのバスに乗った。これが実に快適で今まで他の中南米諸国で乗ってきたバスとはまるで違い、いったんサロンカーマに乗ってしまうと他の長距離バスには乗れないなあと思うほどだった。

サンチアゴに着くと大洋漁業の事務所に電話をし、教えてもらった住所を頼りに探した。事務所はサンチアゴの中心地のオフィス街にあった。10階建てのビルの6階の1室でこじんまりとした部屋だった。日本人スタッフは支店長の堤さんとその他に田辺さんと林さんの3人だけで、あとチリ人のスタッフが5人、総勢8人の事務所であった。サンチアゴでは堤さんの社宅に居候させてもらった。彼はチリにはもう8年勤務しており、ずっと単身赴任だそうだ。サンチアゴは他の南米の都市に比べると見どころは少なく、その分ゆっくり過ごした。堤さんはとても気さくな方で好きに過ごしていいからと社宅の合鍵まで貸してくれた。社宅はサンチアゴの高級住宅街のマンションでかなり広く、治安も比較的いい場所だった。朝はゆっくり起き、お昼頃地下鉄(なんとチリには地下鉄があった、このことだけでも他の南米諸国とは違う雰囲気がある)で事務所まで行きお昼をごちそうになり、午後は町をぶらぶらしたり、事務所のe－mailを使わせてもらったり、事務所の会議室の本棚にゴルゴ13が20冊くらいあったのでそれを読破したり、衛星版の日本の新聞が1日遅れで来るのでそれを読んだり、なぜか週刊現代や週刊実話なども豊富にあり、ひさしぶりに日本の活字の情報に触れた。チリ人スタッフは5時になると速攻で帰ってしまうらしい、実際にそうだった。したがって5時以降はほとんど毎日日本人社員だけになってしまうらしい。残業の日は僕も事務所にごろごろしていた。そんな時はいつも堤さんが「よう、酒飲むか」とどこからかウイスキーを持ってきて冷凍庫から氷も持ってきて、そしてしまいにはこれはフォークランド諸島のいか釣り漁船からもらったんだと空き箱いっぱいのするめを持ち出してきて、彼等はそれを酒の肴に残業をし、僕は例のゴルゴシリーズを読みあさっていた。仕事が終わると堤さんにまた日本食屋や中華料理屋などでごちそうになったり、社宅で一緒に自炊したりした。堤さんは夜はたいていは自炊してるらしい。8年間も単身赴任だからねえ。

ある日、堤さんに今後の予定を聞かれて、パタゴニアまで行きたかったけど後々のことを考えるともう時間も金も足りなくなるようなのでもうそろそろまたグアテマラに戻ってうんぬんという話をしたら、せっかくだからパタゴニアの入り口のプエルトモンという町まででも行ってみたら、魚がおいしいからと言ってくれた。

プエルトモンの町並みはもう完全にヨーロッパの片田舎の風景だった。住民もドイツ系移民が非常に多く、たまに店の看板でスペイン語の下にドイツ語でも書いてあるものも見かけた。ここは港町でこのあたりはチリでも有数の漁場があるらしく、堤さんたちも頻繁に魚の買い付けにやって来るらしい。サーモンがおいしかったと後で堤さんに言ったら、あそこのサーモンは残念ながらほとんどが養殖だよという返事だった。天然物とばかり思っていたので意外だった。

プエルトモンから再びサンチアゴに帰り、グアテマラまでの飛行機のチケット(今度はさすがに

陸路を帰る気力はなかった)を購入し出発まで数日また堤さんにお世話になった。結局1週間ちかく堤さんにはお世話になった。こんなにお世話になったので堤さんの宣伝を1つ。"読むクスリ"(上前淳一郎著)という本を御存じだろうか。この本に堤さんのことが少し紹介してある。話は簡単にするとだいたいこんな感じ。大洋漁業生産事業部に籍を置く堤さんは昭和49年から6年間、サハラ砂漠の沖合いのカナリア諸島の駐在所に勤務していた。遠洋漁業の日本漁船の基地である。そこの子供たちがいつも物乞いにきて、日本との違いを感じ、何かこれに対してできることはないかと考えていた。昭和55年、久しぶりに日本に帰国し、消費天国の日本を痛感したという。ある日、ある出来事から古着を向こうの子供たちに送ってはどうかというアイデアが浮かんだ。社内にこのことを呼び掛けるとどんどん古着が集まり、NHKがローカルニュースでこのことを取り上げさらに集まり、背丈ほどもある段ボール箱4つに詰められた衣類は昭和58年、アフリカの国ならどこでもかまわないという条件でアルジェリアの船に積まれてアフリカへと送りだされた。その数カ月後、堤さん宛にアルジェリアの船で荷物が届いた。アフリカの子供たちからのお礼だった。中を開けて堤さんはびっくりした。赤茶けた砂のつまったビンが100個ほど入っていた、サハラの砂だった。なにも持たない彼等はせめてものお礼にとそのサハラの砂を送ったのだ。

こんなきれいな話はめったにないだろう。そんな堤さんにチリでお世話になったことはおそらく一生忘れない。

11月25日、朝6時半発の飛行機だった。その日は堤さんがわざわざ車で空港に送ってくれた。どこの国に行っても日本人旅行者ばかりだしいやだという気持ちもわかる、でも長いこと異国の地をうろうろしていてたまに日本人に会ったりするとなんかうれしい、そんな時、ああやっぱり僕は日本人なんだとつくづく思ってしまう。堤さんと別れる時ふとそう思った。

13～再びグアテマラへ

約3ヶ月ぶりにグアテマラに戻った。グアテマラシティーのアルカスの事務所にまっすぐ向かい、コラムやその他のスタッフたちと久しぶりに再会した。今度はウミガメのプロジェクトとは別のフローレスという町で行われているもう1つのプロジェクトにボランティアとして1ヶ月くらい働く予定だが、その前にグアテマラシティーでいろいろやりたい事があったのでアルカスの事務所にしばらく泊めてもらうことにした。実は僕が中南米を旅行していた9月頃に大学の友人のKさんたちが日本からグアテマラの日本大使館に即席ラーメンやお茶漬けの素や即席の味噌汁や日本の雑誌などを郵パックで送ってくれていたらしく、特に小荷物などの郵便事情が悪かったので届くことはあまり期待していなかったが、それでもちょっと期待して大使館に行ってみた。そしたらなんと届いていたのだ。そして、荷物を受け取ろうとした時、大使館の若い男性職員の方から「あれ、もしかしてアルカスのウミガメ保護センターで働いていた人じゃないですか。」と呼び掛けられた。ええ？と思い顔を見るとなんか見たことのある顔だった。実は彼とは1回あったことがあった。僕がウミガメ保護センターにいたころ、グアテマラシティーの日本人学校の生徒と先生たちが1日見学に来たことがあった。その時に大使館員の彼も付き添いで来ていたのだ。大使館の待ち合い室でこの3ヶ月間の旅の話などをしてしばらく過ごした。彼もマチュピチュには行ってみたいらしくそのへんのことを僕も知っている限り彼に教えてあげた。大使館員はだいたいどの国も一般の旅行者には事務的な人が多い中彼は例外にも気さくな人だった。

フローレスに出発する前日、アルカス理事長のミリアムの自宅でのサンクスギビングデーのパーティーに招待された。コラムと彼の奥さんと僕の3人で行った。パーティーにはミリアム一家やその兄弟家族などが来ており最初僕がここに来ていいのだろうかと思ったが、ミリアムやコラムがみんなに紹介してくれ、皆とてもフレンドリーな人たちでなかなか感じのいいパーティーだった。

パーティーの翌日、フローレスへ飛行機で行った。フローレスまでの飛行機はジェット機とプロペラ機があり、プロペラ機のほうが安いのでもちろんそれで行くことにした。20人乗りくらいの小型のプロペラ機で約1時間のフライトだ。機種がかなり古くちょっと心配だったがちゃんと飛んだ。スチュワーデスも一応乗っていて機内アナウンスがメガホンで行われた時にはおもわず笑ってしまった。

フローレスに着きアルカスに参加する前にまずはティカル

遺跡に行くことにした。ティカル遺跡は中米のマヤ遺跡で最大の遺跡の1つで、フローレスから約1時間の広大なジャングルの中に50メートル～70メートルの石造りの神殿が散在しており、1番高い神殿に登りジャングル一帯を眺めるとぽつんぽつんと頭を出した神殿群が見える。この神殿群を1つ1つ見ようとすると道に迷わないために地図が必要で少なくとも半日以上は時間が必要な所だ。メキシコやグアテマラまで来る機会があれば是非このティカル遺跡まで足をのばすことをお勧めする。

フローレスは実はペテンイッツァ湖という湖の真ん中にある野球場くらいの小島で、実際のこの地方で機能的に中心となっているのは対岸のサンタエレーナという町である。そのサンタエレーナから2車線くらいの道がフローレスに向かってまっすぐに延びている。（おそらく埋め立てて道を作ったのだろう。）ホコリっぽいサンタエレーナに比べて、フローレスは治安の良く、こぎれいな所。

14～野生生物レスキューセンター

このレスキューセンターでどういうことをやっているかというと、簡単に言うとグアテマラのジャングル一帯に生息している野生生物の保護活動である。密猟によって絶滅の危機に瀕している野生生物が増えているらしい。このレスキューセンターの動物のほとんどは政府が国境で密猟者から没収して政府がここに運んできたものである。その動物たちを健康な状態にもどしジャングルに帰すという活動を行っている。むやみやたらに帰すのではなく、例えばクモザルの場合はセンターに引き渡されるのはたいていが子供なのでまず檻のなかで20匹くらいずつで群れを時間をかけて形成させボスが現れるようにする。そして、その群れを放す場所を調査する、人間の居住地が近くにないか、木の実などのえさは豊富にあるか、等さらに血液検査も行う。病気持ちの動物をいきなり森に放してしまうと元々そこに生息していた動物の生態系をくずしかねないからだ。ジャングルに生息する珍しい動物はアメリカやヨーロッパや日本でかなりの高値で取り引きされており、例えばコンゴウインコはグアテマラシティーのマーケットでは100ドルで取り引きされているが、アメリカではなんと7000ドルで取り引きされている。グアテマラ政府のこの密猟に対する対策は非常に遅く、アルカスのようなNGOが政府を刺激しないとなかなか動かないのが現状のようだ。密猟者もいかに見つからずにアメリカなどに運ぶかを考えているようで、その方法は卑劣なものが多い。例えばいんこを空き缶に詰めたり、車のスペアタイヤの中に隠したり、路線バスのエンジンの中に隠したり、猿などはよく果物や野菜のかごの下に隠したりしている。しかし、その半分以上は目的地に着くまでには死んでしまうという話だ。したがってこのレスキューセンターには体中が傷んで運ばれてくる動物が少なくない。ここで世話している動物はコンゴウインコ、オウム、トゥーカン（熱帯に生息するくちばしが長くカラフルな鳥）、バク、キンカジュー（あらいぐまの一種）、マーゲイ（山猫の一種）、ジャングルに生息する七面鳥の一種、クモザル、キツネ、鹿、鷹などで前回ここに2週間ほど参加した時にはジャガーが2頭保護されていたが、人間に慣れ過ぎて野生にはもう適応できないということでグアテマラシティーの動物園に引き渡されていてもういなかった。

ここでレスキューセンターの紹介を少し。まずクワランテーナという隔離施設がある、運ばれてきた動物はまずこの施設に入れられ健康状態や衛生状態をチェックする。その後センター敷地内に散在した檻に移される。敷地内はなるべく動物を帰す場所の環境と同じようにするために食堂、キッチン、動物用クリニック、ボランティア用宿舎、現地職員用宿舎などの周り以外は木はほとんど切られていない。したがって、実際にはジャングルの中で生活しているような感じがする。ボランティア宿舎といっても木造2階建てのロッジで蚊帳付きのベッドがフロアにずらっと並べられていてプライバシーも何もない。屋根は一応やしの葉で作られていて、壁はすべて網戸みたいになっているが、2階は背の高さくらいまでしか網戸がない、つまりどういうことかというと外から虫が入り放題ということで、蚊取り線香も全く効果がない。（蚊取

り線香は日本のやつと全く同じのがグアテマラの薬局なんかに売ってある)トイレとシャワー室がロッジの外にあり、シャワーの水はセンターの横の湖からポンプで汲み上げて使っている。たまにシャワー室の壁にコウモリがびっしりとまっていたり、タランチュラやサソリが出たりする。タランチュラはこちらが何もしなかったら大丈夫なのでそっとしておいてとっととシャワーを浴びてしまう。サソリは懐中電灯をあてるとどっかに行ってしまう、もしくは足で踏んでやっつける。コウモリは同じく懐中電灯をあてて退散させる。あと蚊に刺されないように体と常にくねくねさせながら体を洗う。シャワーを浴びるのにも一苦労だ。

現地の職員の紹介を少し。毎日食事を作ってくれるのはファナというおばあちゃんで彼女はセンター近郊の村から毎日1時間歩いて通っている。マヤの歴史に詳しく、いつも楽しく話していた。獣医のフェルナンド、彼はあまり働かないので他の職員やボランティアからも評判が悪かった。彼はいつもフローレスに飲みにいってばかりでたまに僕もビールをおごってもらったりしていたんで、根はいいやつかもとか思ってしまう。その他に常勤の職員が4人、フリオ、ビクトル、チェマ、デニス。4人ともとてもいい人たちで、働き者だった。ただデニスはいつも休憩時間にはマリファナ吸っていたけど。あと日本人のMさんという人が1年近くここで働いているらしいが、ちょうど1ヶ月間休暇で日本に帰っていていなかった。彼女はフローレスにある別の自然保護のNGOでも働いているらしかった。

僕以外のボランティアは、スイスから1人、オーストラリアから1人、フランスから2人、ドイツから2人だった。僕らの仕事としては単純作業がほとんどである。朝7時頃と昼過ぎ2時に動物の檻の清掃(だいたいがウンコ掃除)と餌やり、そしてそれが終わった人たちはトルティーヤの生地作り。トルティーヤってなんだ？と思う人もいるだろう。トルティーヤとは中米の主食であるもので、メキシコ料理を食べたことのある人は御存じであろう。作り方はまずとうもろこしのつぶを鍋でグツグツと煮る。そして煮たとうもろこしを今度はすり潰し器ですり潰す。(この行程がかなりの重労働なのでファナ1人ではとても無理なので他の職員やボランティアの仕事)すり潰したものに水を少々加えて練って生地を作る。その生地を一握りずつとって薄く丸く形を作りフライパンで軽く焦げ目がつく程度に焼く。こうしてできたトルティーヤが中米の食卓では毎日お目見えする。現地の人の中にはこのトルティーヤがないとおかずは食べれないという人までいて、例えば食堂などでスパゲッティを頼んでも必ずといっていいほどトルティーヤが付いてくる。あと仕事といえば鳥の餌の木の実を森に採集に行くこと。森の中にどんどん入っていって木の実の成っている木を探す。そしてこれはたいていが身軽なフリオかデニスの仕事でその木に登ってナタでどんどん木の実の付いた枝を切り落とす。それを下で待ち構えている僕らが麻袋に詰めて持って帰る。夕食をすませるとみんなボランティア宿舎には戻らずに食堂でずっとおしゃべりをする、なぜ宿舎に戻らないかというと宿舎の太陽発電装置が壊れていて電灯がつかないからだ、食堂のはかろうじてまだ壊れていない。でもたまに曇りや雨の日が続いたりすると食堂の電灯もつかなくなり夜は明かりがなくなり、その時はろうそくでの生活である。

実はこのセンターの敷地は私有地でそこを借りてプロジェクトを行っていて借地の契約の期限が来年で切れ、しかも土地主が契約の更新を破棄したという現状がある。そのような問題とグアテマラにおける密猟が相変わらず多く、センターに運ばれてくる動物数が増えているという問題によって規模拡大を余儀無くされた。しかし、幸運なことにグアテマラ政府からかなりの規模の土地をフローレス近郊の森に譲り受け、そして日本政府から資金援助を得て1年前から新レスキューセンターの建設が始まっていた。当然僕らボランティアもその建設作業に駆り出せれた。

15～おわりに

年が明けてレスキューセンターの人たちや他のボランティアと別れ、もうそろそろ日本に帰りたくなったので、グアテマラシティーに戻り、アメリカまでのチケットを買うことにした。スペイン語学校のクラスメートだったルスから"日本に帰る途中にでもオレゴンにスキーしに寄らない？"というメールをもらっていた。日本に帰る前に中南米の垢でも落とすつもり？でルスの所に寄ることにした。

1月終わりに日本に帰国。よく人にこんな事を言われる、"いろんな経験ができて、ためになったでしょう、身についたものが多いでしょう"だが、正直言って僕はこんな事を言われると何だか恥ずかしいのか変な気分になる。何にも学んでないような気がするんで、いや元来怠け者で最初から学ぼうとする意志がなかったので。最初から何かを学ぼうとすると何にも楽しめないような気がしたので。それともやっぱり・・・。いや、楽しかったからまあいいか。

おわり（1999年5月）

ご意見、ご感想はこちら（田中健之： t-take@df6.so-net.ne.jp ）まで。

TOPにもどる